

声殺せ～アウトドア×

カント5連発

収録作品

1. 「焚き火が消えるまで声殺してろよ」会社BBQの夜テントの... 3
2. 「凍死しなくなかったら俺に抱かれろ」吹雪のスキー場ロッジ... 21
3. 「氷の上では声が響くんだよ？」深夜の貸切リンクで元日本代... 44
4. 「水の中では息止めてただろ？」離島ダイビングショップで元... 68
5. 「タイムが伸びないなら身体で教え込む」深夜の室内プールで... 87

「焚き火が消えるまで
声殺してろよ」会社BBQの
夜テントの隣で上司が寝てるの
に陽キャ同期に朝まで
5回種付けされた話

「篠宮。……お前、ここ、ないのか？」

ない。ちんこがない。代わりに割れ目がある。六年間、会社の健康診断も、合宿の大浴場も、あらゆる場面で隠し通してきた——その秘密が、キャンプ場の二人用テントの中で、桐生蓮の指先に暴かれた。

「っ……触んな……っ」

「5年前、健診の書類で見た。カントボーイだって。——ずっと知ってた」

テントの天井が低い。隣のテントから課長のいびきがごうごう聞こえる。虫が鳴いている。焚き火がぱちりと爆ぜた。

「知ってて、お前が好きだ」

「……っ、気持ち悪いだろ。やめろよ……」

涙が出た。六年間、隣にいた。ネクタイを結んでもらった入社式から、営業と営業事務で書類を回し、残業後にラーメンを食いに行き、忘年会で肩を並べて酔い潰れた。——その全部が、嘘になる。

桐生の親指が涙を拭った。

「気持ち悪いわけないだろ。——むしろ、もう俺以外には見せるな」

ファスナーの金属音が、テントの中に響いた。ハーフパンツごとトランクスが引き下ろされる。山の夜気が、剥き出しにされたそこに触れた。

ひゅ、と息を呑む。

桐生が篠宮を仰向けにし、膝を押し開いた。閉じようとする太腿を

、桐生の体重が押さえ込む。

「……っ、やだ、見るな……っ」

「見えねえよ、暗いから。——でも触ればわかる」

桐生の指がカントに触れた。

「っ——う……っ♡」

全身がびくんと跳ねる。自分の意志とは関係なく、腰が浮いた。他人の指がそこに触れたのは、生まれて初めてだった。

「……濡れてる。まだ何もしてないのに」

（うそ……っ、濡れてなんか……っ♡♡）

嘘じゃない。桐生の指先にぬるりと蜜が絡む。トランクスを下ろされた瞬間から、身体はもう反応していた。告白されて、暴かれて——恐怖なのか、混乱なのか、それとも。

「やめ……触るなって……っ」

「やだ」

短く言い切って、桐生が割れ目を指先でなぞった。上から下へ、ゆっくり。ぬちゃ、と蜜が糸を引く音がテントの中に響く。

（聞こえる……っ♡ こんな音、出してるの俺の……っ♡♡）

クリトリスの包皮を親指の腹で押された。

「ひ……っ♡♡」

腰がガクンと跳ねた。桐生の空いた手が篠宮の口を塞ぐ。

「声出すなよ。隣で課長寝てる」

(わかってる……っ♡ わかってるのに……っ♡♡)

親指がクリトリスの上で円を描く。ぬちゃ、ぬちゃ、と蜜が皮膚と指の間に粘る音。篠宮は桐生の掌に「んんっ♡ んぐうっ♡♡」と声押し殺した。鼻から漏れる吐息が荒い。

「ここか。……こんな小さいのに、すげえ反応するな」

(やだ……知らなかった……っ♡ こんなとこ触ったこと……ないのに……っ♡♡)

桐生の中指がカントに沈んだ。

「んっっ——♡♡」

処女のカントが異物を拒むようにきゅっと締まる。関節まで入った指を、内壁が脈打つように絞め上げた。

「きっつ……♡ 指一本でこの締めり方か」

桐生の声が低く掠れている。普段の陽気な声とはまるで違う。営業部のエースが飲み会で場を回すあの声じゃない。——篠宮だけに向けられた、獣の声。

くちゅ、くちゅ、と内部が鳴った。指がゆっくり前後する。愛液が指に絡み、溢れ、割れ目を伝って寝袋に滴る。

「んんっ♡ んう……っ♡♡ ひっ♡ やだ、音っ……♡♡」

「お前のカントが鳴ってんだよ」

親指はクリトリスを休みなく刺激し続けている。上と中の挟み撃ち

。太腿の内側に汗が滲み、篠宮の腰がガクガクと震えた。

二本目の指が追加された。

ずちゅり♡♡

「あっ♡♡ ひぁ……♡♡ ひろ、がっ……♡♡」

カントが押し広げられる。背中が弓なりに反った。桐生の口を塞ぐ手の隙間から「ひっ♡ ひんっ♡♡」と声が漏れる。

（男なのに……っ♡♡ 男なのにこんなとこ広げられて……っ♡♡
こんな声出すなんて……っ♡♡）

桐生の指先が前壁のざらついた場所を掻き上げた。

「んんんっっ——♡♡♡」

「しっ。……見つけた。お前の弱いところ」

ざらついた粘膜をゴリゴリとこすりあげながら、親指でクリトリスをぐりぐりと潰す。カントから愛液が噴くように溢れ、じゅぷじゅぷ♡♡と卑猥な水音がテント内に響いた。

隣のテントで、課長のいびきが一瞬止まった。

二人とも息を止める。

——いびきが戻った。

「っ……♡♡ はぁ……っ♡♡ こわ……った……♡♡」

「怖かったか？——でもお前のまんこ、今の瞬間がいちばん締まったぞ」

(うそ……やだ……っ♡♡ バレそうになって……興奮した、なんて……っ♡♡)

桐生が指を速めた。Gスポットをゴリゴリ責めながら、クリトリスを親指の腹で押し潰す。

「ひんっ♡ ひっ♡ あ♡ あっ♡♡ やだやだやだっ♡♡ なん
か……くるっ♡♡ おなかの奥から……なんか……っ♡♡♡」

「いいよ、イケ。——俺の指でイケ」

「ん`ん`ん`——っ♡♡♡♡」

全身が痙攣した。カントがきゅうきゅうと桐生の指を締めつけ、愛液がどくどくと溢れる。声を殺しきれず、甲高い嬌声がテントに一瞬響いた。

隣のテントで誰かが「んー？」と寝返りを打った。

——いびきが戻る。

桐生の唇が耳朶に触れた。

「いい声。……でも次はもっと我慢しろよ」

ぬるり、と指が抜かれた。蜜が糸を引く。カントがひくひくと収縮して、溢れた愛液が篠宮の太腿を伝い、寝袋を汚していく。

(イッた……♡♡ 桐生の指で……イっちゃった……♡♡ 男なのに、カントで……っ♡♡♡)

余韻に浸る暇はなかった。

桐生がカーゴパンツを脱いだ。暗闇の中でも、勃起した陰茎の存在感がわかる。篠宮の尻に触れた瞬間、その熱さに身が竦む。

「ま……待って……っ」

「待たない。6年待った」

桐生が背後から密着した。横向きスプーン。篠宮の片脚を持ち上げ、後ろからカントに先端を宛がう。テントの天井が低いから、この体勢しか取れない。

ぐちゅ、と先端が蜜に触れる音。

「入らない……無理……っ♡♡ おっきすぎ……っ♡♡」

「入るよ。——お前のまんこ、さっき俺の指でぐちょぐちょにしたばっかだろ」

じゅぷ♡♡と先端が沈んだ。愛液で滑り、カリが膣口を押し広げる。処女のカントが異物を拒んでいる。けれど桐生の指で十分にほぐされたそこは、拒みきれない。

桐生がゆっくり腰を進めた。一寸ずつ。膣壁が陰茎にぎちぎちと吸いつく。

「いっ……♡♡ た……っ♡♡ 太い……っ♡♡♡」

「きつ……お前のカント、俺のチンポ噛みすぎ……」

半分。内壁が脈打つように陰茎を締めている。結合部から蜜が泡立ち、ぐちゅ♡と小さな音がした。

(裂ける……っ♡♡ 裂けちゃう……っ♡♡ でも……痛いのに…
…なんで……奥が……っ♡♡)

痛いはずなのに、身体が拒んでいない。カントの奥が、疼いている。もっと深く、身体のどこかが叫んでいる。

桐生が残りを一息に押し込んだ。根元まで。先端が子宮口にこっぴん♡♡と当たる。

「ひあっ♡♡♡」

声が漏れた。桐生が咄嗟に口を塞ぐ。

「当たった。……お前の子宮口。ここだな」

(子宮……っ♡♡ 桐生のが……俺の子宮に……っ♡♡)

——わたし、と言いかけた自分に愕然とする。

ゆっくり引かれ、また奥まで突かれた。横向きの体勢で、背後から深く。ずちゅ、ずちゅ、ぐちゅ♡♡と水音が止まらない。篠宮の愛液だけでこの音が鳴っている。

「すげえ濡れてる……お前のまんこ、俺のチンポがそんなに嬉しいのか？」

「ちがっ……♡♡ そんなこと……んぐうっ♡♡♡」

桐生が篠宮の耳たぶを噛みながら、ペースを上げた。ぱちゅ♡ぱちゅ♡と蜜が弾ける音がテント内に響く。

篠宮の身体が変わり始めた。

逃げていた腰が、桐生の突きに合わせて押し返す。無意識に。

「……篠宮。お前、腰振ってんの、気づいてるか？」

「えっ——♡♡ ちが、それは……っ♡♡♡」

(嘘……っ♡♡ 俺……自分から腰、動かしてた……？♡♡ 男の

身体で……こんな……っ♡♡♡)

「嘘つけ。お前のまんこが俺のチンポ離さないんだよ。引くたびに吸いついてくる」

桐生が腰を止めた。奥まで入れたまま、動かない。篠宮のカントがひくひくと桐生の陰茎を締めつける。

(やだ……っ♡♡ 動いてほしい……っ♡♡ こんな認めたくないのに……身体が桐生を求めている……っ♡♡♡)

「……動いて……♡」

「なんて？ 聞こえない」

「っ……動いて……くれ……♡♡」

桐生の低い笑い声が首筋に落ちた。一気にペースが上がる。ぐちゅぐちゅぐちゅ♡♡♡と水音が激しくなり、子宮口を抉るように先端が押しつけられた。

「あゝっ♡♡ あゝっ♡♡ 奥っ♡♡ おくうっ♡♡♡ だめ、そこ壊れっ——♡♡♡♡」

桐生が篠宮の口を塞ぎ、もう片方の手で下腹を押さえた。内側から陰茎の膨らみが掌に当たる。

「ここに出すぞ。お前の子宮に、全部」

篠宮が首を振った。桐生は止まらない。子宮口に先端を押し込み——

どくん♡♡ どくん♡♡ どくん♡♡

「んんんっ♡♡♡♡ あっつ……っ♡♡ 中、あついっ……♡♡♡

♡」

精液が子宮内に注がれた。桐生の陰茎が脈打つたびに、篠宮のカントが痙攣する。熱い塊が子宮の壁を叩く感覚に、意識が白く弾けた。

(中出し、された……っ♡♡♡ 桐生に……子宮に……精子、入れられた……っ♡♡♡♡)

ずるり、と桐生がゆっくり抜いた。抜けた瞬間、結合部から精液と愛液の混合液がどろりと溢れ、篠宮の太腿を伝う。

カントがぼっかりと開いたまま、ひくっ♡ ひくっ♡ と収縮を繰り返す。奥から白濁がとろとろこぼれ続けた。

「……閉じなくなってるな。俺の形、覚えたか？」

返事ができない。涙と汗で顔がぐちゃぐちゃだ。寝袋に顔を押しつけて、自分の身体に起きたことを受け止めきれないでいる。

(処女、奪われた……っ♡♡ カントで桐生を咥え込んで……イッて……中に出された……♡♡ 男なのに……♡♡♡)

桐生が篠宮を仰向けに組み敷いた。両膝を抱え、M字に開かせる。

「なっ……待っ……まだ中から出てっ……♡♡」

カントが精液でぐちゃぐちゃに濡れた状態で晒された。

「エロいな……俺の精子がお前のまんこから溢れてる」

「やっ——♡♡ まだ無理っ♡♡ さっき出したばっかでし……ひあっ♡♡♡」

再挿入。精液がローションの代わりになり、ずぶずぶと抵抗なく根

元まで沈む。カントが精液と愛液の泡でぐちゅぐちゅと鳴った。

正常位で腰を使い始める。ゆっくり、深く。引くときにカリが膈壁を擦り、蜜と精液が掻き出される。押し込むたび、先端が子宮口を押し開く。

「あ♡ あ♡ んっ♡♡ さっきの、まだ中にっ……♡♡♡」

「当たり前だろ。お前の子宮に出したんだから。——次もここに出す」

桐生が下腹を掌で押さえながら突いた。自分の腹の上にある桐生の手。その下で、カントが犯されている。

「なあ篠宮。カントボーイって孕むんだろ？」

「っ……やめ、その話……♡♡」

「俺の子、ここに宿ったらどうする？」

ぐり♡♡と子宮口を押す。

「営業部と営業事務で同期婚。——悪くないだろ」

「馬鹿っ……そういうことじゃ……あゝ あゝ っ♡♡♡ そこ突くなっ♡♡♡♡」

(孕む……♡♡ 桐生の子を……俺が……っ♡♡ 馬鹿、ありえない、ありえないのに……お腹の奥がきゅんって……♡♡♡)

桐生がペースを上げた。ぐちゅぐちゅぐちゅ♡♡♡と精液と愛液が混ざり合う音がテントに充満する。

声が止まらない。桐生が枕を篠宮の顔に押し当てた。

「囁んでろ」

「んんっ♡♡ んぐうっ♡♡♡ ひんっ♡♡♡♡」

枕に悲鳴を吸わせながら、全身で桐生を受け止める。

——テントの外で、足音がした。

ザッ、ザッ、ザッ。砂利を踏む音。近づいてくる。

二人とも凍った。桐生は挿入したまま動きを止めた。篠宮のカントが恐怖と緊張で桐生の陰茎をぎゅうぎゅうと締め上げる。

足音がテントの真横を通過する。一メートル半先。ナイロン越しに、人影がぼんやり見えた。

「うう……トイレトイレ……」

課長の声だった。

足音が遠ざかる。小用を足す音。——戻ってくる。またテントの真横を通過した。

心臓だけがどくどく鳴っている。桐生の陰茎が篠宮の中で脈を打ち、篠宮のカントがそれに応えるように痙攣した。

課長のテントのファスナーが閉まった。——いびきが再開する。

桐生の唇が耳に触れた。

「……やべえ、お前のまんこ今の最高だった。バレそうになったら締まんのな」

「お前のせいだろ……っ♡♡」

(怖かった……♡♡ バレるかと思った……♡♡なのに、カントは締まって……桐生を離さないって……♡♡♡ こんな、もう男のプライドとか……っ♡♡♡♡)

桐生がすぐに腰を再開した。焦りと興奮が混じり、さっきより速く、深い。ぱんぱん♡♡と肉がぶつかる音。もう音を殺す余裕がない。

「あゝっ♡♡ あゝっ♡♡ あゝ あゝ あゝっ♡♡♡ 桐生っ♡♡きりゅ……だめ♡♡ イクっ♡♡ またイっちゃうっ♡♡♡」

「イケよ。——俺の精子で子宮いっぱいにしてやるから」

カントが桐生の陰茎を絞り上げた。絶頂。桐生も限界だ。子宮口に先端を押しつけ、二回目の中出し。どくどく♡♡♡と子宮に精液が注がれる。

「んんんっっ♡♡♡♡♡ あつ……中、またいっぱい……っ♡♡♡」

「孕め。——もう他の男のは入らないな」

抜いた瞬間、カントから精液がどろどろと溢れた。膣口が開いたまま、ひくひく♡♡と痙攣する。奥から白濁がとろとろこぼれ続け、篠宮の太腿と寝袋を白く汚した。

深夜3時。焚き火は完全に消えている。テントの中は汗と精液と愛液の匂いで蒸していた。寝袋はぐちゃぐちゃ。虫の声だけが外から聞こえる。

桐生がタオルで篠宮の股を拭こうとした。

篠宮が、その手を止めた。

「……もう一回」

「……篠宮？」

「お前のせいだろ。こんな……身体にしといて。……もう一回してくれないと、おかしくなる」

(認めたくない……♡♡ こんなに認めたくない……♡♡ でも身体が止まらない……♡♡ 桐生が抜けたカントがまだきゅうきゅう鳴ってる……♡♡ 空っぽで寂しいって……泣いてる……♡♡♡)

篠宮が桐生の上に跨った。自分でカントに陰茎を宛がい、腰を落とす。

ずぶり♡♡♡

根元まで。精液まみれのカントは桐生を何の抵抗もなく飲み込んだ。じゅぶ♡♡と精液が結合部から噴き出す。

「っ……お前から入れるのか……」

「うるさい……♡♡ 黙ってて……♡♡♡」

ぎこちなく腰を揺らす。自分で桐生の陰茎をカントに咥え込みながら、気持ちいい角度を探す。ぬちゃ♡ぬちゃ♡と精液が泡立つ音。

「あっ♡♡ ここ……♡♡♡ ここ当たるっ♡♡♡♡」

子宮口に先端が直接押しつかれる角度を自分で見つけた。そこを繰り返し打ちつける。桐生が下から腰を掴み、動きを手伝った。

「自分で見つけたな、気持ちいいところ。——そこ、自分で当ててイけよ」

「んゝっ♡♡ んゝ んゝっ♡♡ あっ♡♡ そこ当たるたびっ♡♡ お腹の奥がぎゅって……♡♡♡♡」

(もう無理……♡♡ 男のプライドなんてもう……♡♡ 自分から腰振って桐生のを咥え込んで……気持ちいいとこ探して……♡♡ 完全にメスじゃん……♡♡♡)

無我夢中で腰を動かした。カントからぐちゅぐちゅ♡♡♡と水音が溢れ、精液がぼたぼたと二人の腿を伝う。

桐生の指がアナルに伸びた。カントから溢れた精液と愛液を指に絡め、アナルの入り口を浅く押す。

「っ♡♡♡ そっちは……♡♡♡」

「前も後ろも空いてるのに、片方だけなんてもったいないだろ」

ずぶ♡♡と指がアナルに沈む。薄い壁の向こうで、陰茎と指がお互いの存在を感じ合っている。カントの締まりが一変した。反射的にきゅうっと膣壁が絞まる。

「あゝ あゝ っ♡♡♡♡ 前も後ろもっ♡♡♡ やだ、おかしくなるっ♡♡♡♡ 壊れっ……壊れちゃうっ♡♡♡♡♡」

「壊れていいよ。俺の前でだけ壊れろ。——お前のまんこも尻も、全部俺のもんだ」

(独占される……♡♡♡ 桐生に全部暴かれて……前も後ろも犯されて……♡♡♡ 二穴同時に責められたら頭が真っ白になる……♡♡♡)

桐生がカントの中で射精した。同時にアナルの指を奥まで押し込む。前後同時の刺激に篠宮の意識が飛んだ。カントから潮が吹き、全身を痙攣させながら桐生にしがみつく。

「り……っ♡♡♡ りょ、れんっ♡♡♡♡ れんれんれんっ♡♡♡♡♡」

名前を呼んだ。初めて。下の名前で。

涎が顎から垂れた。涙と汗で顔がぐちゃぐちゃだ。壊れた篠宮が桐生にしがみつき、腰の動きを止めない。カントが桐生の陰茎を締めつけ、搾り取ろうとしている。

薄明。テントの布越しに空がうっすら白い。鳥が鳴き始めている。

篠宮が桐生の胸に顔を埋めたまま、小さく腰を揺らしていた。カントが桐生を離さないと叫んでいる。

「……もっと……中に……出して♡♡♡」

桐生の目の色が変わった。

篠宮を仰向けにし、両脚を肩に担いだ。種付けプレス。最も深く、最も子宮口を犯す体勢。

「最後だ。——全部、お前の一番奥に叩き込む」

挿入。ずぶり♡♡♡ 根元から先端まで、カントが桐生を飲み込んだ。子宮口に先端がめり込む。桐生の形に馴染んだカントが、吸い付くように絡みついた。

桐生が全体重で腰を叩きつけた。テントのペグが浮くほどの振動。ぐちゅぐちゅぱんぱん♡♡♡♡と、精液と愛液と肉体がぶつかる音が山間の朝に響く。

もう声を殺す意思がない。

「あゝ あゝ あゝ っ♡♡♡♡ すきっ♡♡ 好きっ♡♡♡ 蓮っ♡♡ 好きっ♡♡♡♡ 全部ちょうだいっ♡♡♡♡ 中に、お前の全部 っ♡♡♡♡♡」

「好きだ奏太。6年分全部、お前にぶちまける——っ」

(堕ちた……♡♡♡ 完全に堕ちた……♡♡♡ 桐生のちんぽで…
…カントで……子宮で……♡♡♡ 男としての自分はもう……♡♡
♡ 桐生の前では……♡♡♡♡)

最後の射精。子宮口にめり込んだまま、残った精液を全て注ぐ。篠宮のカントが痙攣し、全身が弓なりに反った。声にならない絶叫。目の焦点が飛び、手の指が桐生の背中に食い込む。カントが陰茎を搾り取るように締め上げ、一滴残らず子宮に引き込んだ。

五回分の精液が、篠宮の子宮を満たしている。

鳥がうるさい。完全に明るい。

隣のテントから課長の声が聞こえた。

「おーい、誰か起きてるかー？ 朝飯やるぞー」

篠宮は桐生の腕の中で意識が朦朧としている。下半身は精液まみれ。カントからまだ白濁がとろとろ溢れている。腹の中が熱い。寝袋は使い物にならない。テント内が二人の体液の匂いで充満していた。

「……やべえな」

「全部お前のせいだろ……♡」

桐生が篠宮の耳に唇を寄せた。

「帰ったら俺の家来いよ。今度はベッドで、声出していいところで、朝までやる」

篠宮が桐生のTシャツの裾を掴んだ。離さない。

「会社に戻っても、これ、なかったことにできないからな」

テントの外で、課長が薪を割る音が響いている。

篠宮のカントが、まだひくひく♡♡と痙攣を続けていた。

桐生の精液の匂いが染みついたパーカーを、篠宮はもう脱ぐ気がなかった。

「凍死したくなかったら俺に
抱かれろ」吹雪のスキー場ロッ
ジで元自衛官に救助されたカン
トボーイが朝まで5回種付けさ
れた話

「……っ♡」

意識が泥の底から浮かび上がる。最初に感じたのは、背中に貼りついた分厚い胸板の熱さだった。片腕で胴を丸ごと挟み込まれている。腹に回された腕は太く、逃げ場を奪う拘束そのもの。

そして――掌。

大きな掌が、パンツの上から股間を覆っていた。

「やっ……♡♡ な、なに……っ♡♡」

身体を振ろうとして、力が入らない。指先も足先も感覚がほとんどない。頭がぼんやりして、思考が纏まらない。寒い。全身が芯から冷え切っている。でもそこだけ――股の間だけが、掌の熱で焼けるように疼いていた。

「動くな。低体温で末梢の血流が止まってる。ここが一番冷えてる」

耳元で低い声がした。振り向けない。身体ごと寝袋に包まれて、後ろから抱き込まれている。暖炉の薪が爆ぜる音。木の壁。ここは――

「温めないと壊死する。じっとしてろ」

掌が動いた。ゆっくり、撫でるように、パンツ越しに割れ目をなぞる。

「ッ……♡♡ そ、そこっ♡♡ 自分で、やるから……っ♡♡」

（この人、何……っ♡♡ まって、ぼくの……っ♡♡ ぼくのそこ、触って……っ♡♡）

声が震えた。自分のものだと思えない、甘く掠れた声。抵抗し

ようにも腕一本動かせない。低体温で筋肉が固まっている。この男の片腕の力に、到底かなうわけがなかった。

記憶が断片的に蘇る。吹雪。ホワイトアウト。膝まで埋まる雪の中、手袋の中で指が死んでいく感覚。それから——腕に抱えられて走る振動と、この男の胸板から伝わってきた獣みたいな熱。

「自分で？ この手で何ができる」

一颯の手首を掴み、持ち上げた。指は紫がかっていて、握ることすらできない。ぱたん、と力なく落ちる。

「……っ」

反論できなかった。

パンツの中に手が入ってくる。直接。氷室の硬く熱い掌が、冷え切ったカントに触れた。

「——ひうゝっ♡♡」

温度差。

それだけで全身が痙攣した。凍えていた皮膚が掌の熱を貪るように吸い込む。じわ……♡と、奥のほうから何かが滲み出す。

「……濡れてきた。血流が戻り始めてる」

「ちが……っ♡♡ それっ、汗っ……♡♡」

嘘だった。汗じゃない。カントが、濡れている。こんな状況で、こんな場所で、見知らぬ男の手で。

(やだ……♡♡ 何で濡れてるのっ♡♡ ぼく、男なのに……♡♡
こんなところから……っ♡♡)

二十四年、ずっと目を背けてきた。着替えは個室。温泉は拒んだ。自分の身体に触ることすら怖くて、ずっと蓋をしてきたのに——今、見知らぬ男の掌がその蓋を剥がしにかかっている。

「せ、せめて……っ♡♡ 見ないでっ……♡♡ お願い……っ♡♡」

「見てない。後ろ向きだ」

確かに、寝袋の中で後ろから抱かれている体勢で、カントは見えない。でもこの男は全部触って分かっている。指先が割れ目をなぞり、形を確かめるように上から下へ滑る。小陰唇の縁を親指が辿り、ぷくりと膨らんだ肉に当たって——。

「っあゝ♡♡ そこっ♡♡ そこ触らないでっ……♡♡♡」

クリトリス。

親指の腹が、小さく硬い突起を捉えた。ぐり……♡♡と円を描くように押し込まれる。

「ここが一番冷えてた。重点的に温める」

「う、嘘っ♡♡ そんなの嘘っ♡♡ あゝっ♡♡ あゝっ♡♡ やだっ……♡♡」

(嘘だって分かってるのにっ♡♡ 身体が……っ♡♡ 止まらないっ♡♡)

氷室の指が回るたびに、ぬちゃ……♡ぬちゃ……♡と寝袋の中から水音が漏れる。恥ずかしい。こんな音を、背中にいるこの男に聞かれている。

一颯は毛布の端を噛んだ。声を殺したかった。でも親指がクリトリ

スを捏ねる角度が変わるたびに、喉の奥から甘い声が勝手に零れ落ちる。

「んっ♡♡ んっ♡♡ んゝ んゝ んゝ ……っ♡♡♡」

「声を出せ。体温が上がる」

「出してなっ……んゝ っ♡♡ かって、にっ……出てるっ♡♡♡」

氷室の中指が割れ目を左右に押し開いた。入り口に指の腹が触れる。愛液がとろとろ溢れて、指先をぬるぬると滑らせていた。

「中も確認する」

「やっ♡♡ 中はっ……初めっ……♡♡ 指、入れたことなっ♡♡♡」

告知だけ。許可は求めない。ずぶ……♡♡と中指が沈む。

「ひゝ あっ♡♡♡ あゝ っ♡♡ あゝ っ♡♡ っ……指っ……太いっ♡♡」

氷室の指は太い。節くれだっていて、関節の凹凸が内壁をひとつひとつ擦っていく。処女の狭い中を無理やり押し拡げられる感覚に、背中が弓なりに反った。

（痛い……っ♡♡ 痛い、のに……っ♡♡ 何で……奥からじゅわって♡♡）

痛みが消えていく。代わりに愛液がじゅわ……♡♡♡と溢れて、指の侵入を滑らかにした。身体が勝手に受け入れている。頭は嫌がっているのに、カントは氷室の指に吸いつくように締まった。

「……きつい。だが奥まで熱くなってきた」

「言わないでっ♡♡♡ ぼ、ぼくは男なのに……っ♡♡ こんなっ
……♡♡♡」

言葉が途切れた。二本目が追加される。ぐちゅ……♡♡と卑猥な音が寝袋の中で反響した。

「あゝっ♡♡ あゝ あゝっ♡♡ ふたっ……二本っ♡♡ だめ、広がっ……♡♡♡」

二本の指がゆっくり開閉して、内壁を揉む。奥へ進む。指先がざらついた壁面に触れて――

「――ここか」

短く一言。そこに指の腹を押し当て、ぐりぐり♡♡♡と擦り上げる。

「っひゝ あ♡♡♡ なにっ♡♡ なにそこっ♡♡ やだっ、頭おかしくなっ♡♡♡」

Gスポット。一颯は自分の身体にそんな場所があることすら知らなかった。知る前に、見知らぬ男に暴かれた。

「おっ♡ おっ♡ おっ♡♡ やゝっ♡ こわれるっ♡♡ なかっ♡♡ かき回さないでっ♡♡♡」

三本目。カントが限界まで広げられる。氷室の太い指三本がGスポットを集中的にこね回しながら、親指でクリトリスを上から押し潰す。挟み撃ち。逃げ場がない。

「せ、せんっ……♡♡ あ、ああっ♡♡ あゝ あゝ あゝっ♡♡♡ もう、むりっ♡♡ だめっ♡♡ なんか出るっ♡♡♡」

プシュッ♡♡――潮が氷室の手を濡らした。寝袋の中がびしょびしょになる。一颯は人生で初めての絶頂を、遭難先のロッジで、名前

も知らない男の指で迎えた。

「はっ♡♡ はっ♡♡ はっ♡♡ はひゅ……♡♡ っ……♡♡♡
」

カントがびくびく痙攣して、氷室の三本の指をきゅう♡♡きゅう♡♡と締めつける。抜けない。一颯の中が氷室を離さない。

「……体温が戻った」

低い声。だが指を抜く気配はない。それどころか——背中に押しつけられているものに気づいた。

熱い。硬い。脈を打っている。一颯の尻と太腿の間に、ぬるりと先走りを滲ませた塊が挟まっていた。

「ひっ♡♡ なに……これ……っ♡♡」

「……悪い。抑えが利かなくなった」

初めて、氷室の声に揺らぎがあった。

寝袋から引き出される。暖炉の前の毛布の上に仰向けにされた。炎が揺れ、橙色の光が汗ばんだ肌を舐める。

氷室がズボンを脱いだ。

一颯は——息を忘れた。

(嘘……♡♡ こんな……っ♡♡)

太く、長く、反り返った陰茎。カリが大きく張り出し、血管が浮き上がっている。先端から先走りが太い糸を引いて暖炉の光を弾いていた。日焼けした浅黒い肌の中で、さらに色が濃い。

「む、無理……っ♡♡ 入らないっ♡♡ 指三本でもきつかったの
にっ♡♡♡」

「入る。お前の中はもう十分ほぐれてる」

一颯の脚を持ち上げる。カントが暖炉の炎に照らされ、愛液と潮で
とろとろに光っていた。小陰唇が充血してぷっくり厚くなり、入り
口が半開きになっている。氷室の目が——一瞬、獣の色に変わった
。

先端がカントの入り口に触れる。ぬちゅ……♡♡と愛液を纏った。

「力を抜け」

「抜けないっ♡♡ 怖いっ♡♡ お願いっ♡♡ やめ——」

ずぶ……♡♡♡

押し込まれた。一切の躊躇なく。

「ひゝ あゝ あゝ っっ♡♡♡ さ、裂けっ♡♡ 太すぎっ♡♡ 中っ
♡♡ いっぱいっ♡♡♡」

亀頭の最も太い部分が入り口を通過する瞬間、カントがぐぶっ♡♡
♡と咥え込んだ。愛液がたっぷり分泌されているせいで、そのまま
ずぶ……♡♡ずぶ……♡♡と奥へ沈んでいく。処女膜がぷちん、と
裂ける微かな痛み——それより遥かに大きな、内臓を押し広げられ
る充満感が全身を貫いた。

根元まで。氷室の下腹が一颯の股間に密着する。子宮口にカリがこ
つん♡♡と当たった。

「あゝ ……♡♡ おく……♡♡ 奥にっ、当たってるっ♡♡ お腹
っ♡♡ おなか、いっぱいっ♡♡♡」

「奥まで入った」

氷室の声が掠れている。喉の奥から絞り出すような、熱い息。

「……お前のまんこ、俺のちんぽを折りにかかっている。こんなに締め——」

「しめてないっ♡♡ 勝手にっ♡♡ ぼくのっ♡♡ 勝手に締まっ
……あゝっ♡♡♡」

（ぼくの身体がっ♡♡ こんなもの受け入れてるっ♡♡ 男なのに
っ♡♡ 男の、おちんぽ……っ♡♡♡）

動き始める。ゆっくり引いて——突き入れる。ずちゅ……♡♡ずちゅ……♡♡。結合部から白い泡が溢れ、カントの縁にまとわりつく。

一颯は毛布を両手で掴んだ。爪が食い込む。声を殺そうと唇を噛むが、子宮口を小突かれるたびに全身に電流が走って、歯の間から喘ぎが零れた。

ぐちゅ……♡♡ぐちゅ……♡♡ぐちゃ……♡♡

水音が暖炉の薪が爆ぜる音と重なる。

「あゝっ♡ あゝっ♡ あゝっ♡♡ おくっ♡♡ 子宮っ♡♡ そこ突かないでっ♡♡ 壊れちゃ……っ♡♡♡」

「壊れない。お前の中が俺を離さないだろう」

ピストンが加速する。ぱん♡♡ぱん♡♡と腰を打ちつける音がロッジの壁に反響した。木造の床が軋む。汗が一颯の鎖骨を伝い、薄い胸を流れ落ちて乳首の上を通過する——びくん♡♡と身体が跳ねた。

「乳首にも反応するのか」

「ちがっ♡♡ 汗がっ……あゝっ♡♡♡ 触んないでっ♡♡」

片手で腰を掴んだまま、もう片方の親指が薄いピンク色の乳首を押し潰した。ぐり♡♡と回す。下は子宮口を、上は乳首を——三点を同時に責められて、一颯の視界が白く弾けた。

「なかにっ♡♡ 出さないでっ♡♡ 妊娠っ♡♡ ぼくっ♡♡ 妊娠しちゃうからっ♡♡♡」

「お前の子宮が俺の先端に吸いついてる。欲しがってるのはお前のほうだ」

否定できない。カントが氷室のペニスをきゅう♡♡きゅう♡♡と絞り上げ、子宮口が亀頭に吸いつくように開いていた。頭では拒んでいるのに、身体は真逆のことをしている。

（やだ……♡♡ やだよ……♡♡ ぼくの身体がっ♡♡ おちんぼ欲しがってるなんてっ♡♡♡ 認めたくないっ♡♡♡）

氷室が一颯の両脚を肩に担ぎ上げた。角度が変わる。最深まで突き入れ、子宮口にペニスの先端が嵌まり込む。

ドチュンッ♡♡♡——射精。

「あゝ ひいゝっ♡♡♡ なかっ♡♡ 熱いっ♡♡♡ いっぱい出てるっ♡♡ 精子っ♡♡ 子宮にっ♡♡♡」

大量の精液が子宮内に直接注がれる。熱い。どろどろで、子宮の壁を叩きつけるように噴き出す——その衝撃で一颯も絶頂した。

カントが痙攣し、子宮が精液を吸い上げるように収縮する。涙が溢れた。涎が頬を伝う。毛布に顔を擦りつけて泣きながら、カントは氷室のペニスを一滴も逃さないように締め上げていた。

「おっ♡ おっ♡ おっ♡♡ 出てるのにっ♡♡ まだ動いてっ♡♡」

射精後もペニスは硬いまま。ずちゅ……♡♡ずちゅ……♡♡と精液混じりの水音を立てながら、氷室は止まらない。

一颯を対面座位に持ち上げた。太腿の上に跨がらせ、自重で沈み込ませる。

ずぶんっ♡♡♡——さっきより深い角度。重力で串刺しにされる。

「ひゝ ぐうゝ っっ♡♡♡ おなか……っ♡♡ おなかの奥っ♡♡ さっきより深いっ♡♡♡」

逃げられない。重力がペニスの上に一颯を磔にしている。氷室が腰を掴んで上下に揺さぶるたびに、じゅぷっ♡♡じゅぷっ♡♡と精液混じりの愛液が結合部から溢れた。白い泡がカントの縁に溜まっていく。

「んゝ あゝ っ♡ んゝ あゝ っ♡ んゝ あゝ あゝ っ♡♡ だめっ♡♡ またイクっ♡♡ もう何回もっ♡♡♡」

二回目の中出し。子宮がぱんぱんに膨れて、カントの隙間から白濁が逆流する。氷室の腹筋を白い液が伝い落ちた。

「も……無理……っ♡♡」

「もう体温の話じゃない」

氷室が一颯の顎を掴み、顔を上げさせた。暖炉の橙色に照らされた無表情の下で、目だけが暗く燃えている。

「お前が欲しい」

一颯の心臓が、どくん、と鳴った。

＊

薪をくべに立ち上がった氷室の背中を、一颯は毛布にくるまったまま見つめていた。左肩と脇腹に走る古傷が暖炉の炎に照らされ、赤黒く浮き出ている。広い背中。引き締まった腰。

(……何であんなこと言ったんだろうっ♡♡ 「お前が欲しい」って……♡♡)

カントからとろ……♡♡と精液が溢れた。太腿を伝い、毛布に染みを作る。脚を閉じて堪えようとするが、内壁が痙攣するたびにぐちゅ……♡♡と零れてしまう。

お腹の奥がじんじんする。子宮の中に二回分の精液が溜まっている感覚が、はっきり分かる。嫌だ。嫌なのに——空っぽにされた内側が、また何かを欲しがっている。

(やだっ♡♡ 何でっ♡♡ もう十分でしょっ♡♡なのに……カントがっ♡♡ きゅんきゅんしてっ♡♡♡)

氷室がペットボトルを持って戻ってきた。一颯の唇に当て、水を飲ませる。ごく、ごく喉が鳴った。左手が一颯の額に触れ、前髪を払う。

その手つきが——さっきカントを暴いた同じ手とは信じられないほど、丁寧だった。

カントの奥を抉った指が、今は体温を確かめるように額をなでている。

(……ずるい♡♡ そういうの……ずるいよ……♡♡)

胸の奥が、ぎゅっと軋んだ。

「身体を拭く。じっとしてろ」

タオルで汗と体液を拭き始める。肩。鎖骨。薄い胸。腹。丁寧に、けれど手早く。タオルが内腿を滑り、カントに触れた——瞬間。

一颯の腰がびくんっ♡♡と跳ね上がった。

反射的に。自分から氷室の手にカントを擦りつけてしまった。

「——っ♡♡」

止まった。二人とも。

一颯の顔が沸騰した。

(自分からっ♡♡ ぼくっ♡♡ 自分から腰振ったっ♡♡ こんなっ♡♡ こんなの……っ♡♡♡)

「……お前、壊れかけてるな」

氷室が静かに言った。責める声じゃない。確かめるような、低い声。一颯の目を真っ直ぐ見つめている。

「ちっ……ちがっ♡♡ これはっ♡♡ 今のは事故でっ♡♡」

「脚が震えてる。カントからも溢れてる。嘘は身体がつくほうが上手い」

「っ……♡♡♡」

反論できなかった。太腿の間をとろとろと精液が伝い、毛布に滴っている。カントがひくひく痙攣して、空っぽの中が疼いている。

氷室のペニスが——視界に入った。また、硬くなっている。先端か

ら先走りが糸を引いている。二回射精した後だというのに。

一颯の口が開いた。開いてしまった。

「もっ……♡♡」

(だめっ♡♡ 言っちゃだめっ♡♡ ぼくは男なのにっ♡♡ おちんぽ欲しいなんてっ♡♡ 男が言う言葉じゃっ♡♡♡)

「もっと……してっ♡♡♡」

声が出た。自分の声じゃないみたいだった。甘くて、壊れた、懇願の声。

「おちんぽ……っ♡♡ 欲しいっ♡♡♡」

言ってしまった。両手で顔を覆う。恥ずかしい。死にたい。二十四年間、誰にも身体を見せなかった。自分のカントに触ることすら怖がっていた。それが今——見知らぬ男に、おちんぽを懇願している。

でもカントは正直に愛液を滲ませて、太腿がぬるぬると光っていた。

氷室が一颯の両手を顔から引き剥がした。大きな手で、手首を束ねるように掴む。

目が合う。氷室の目が——変わっていた。無表情の仮面が剥がれ落ちた、飢えた獣の目。

「自分で言ったな」

「っ♡♡♡」

「なら——四つん這いになれ」

命令。一颯の身体は、抵抗する前に従っていた。毛布の上で四つん這い。カントを氷室に向けて突き出す格好。

(ぼく……っ♡♡ 自分からこんな格好……っ♡♡ 見せてるっ♡
♡ 精液でぐちゃぐちゃのカントを……っ♡♡♡)

背後から氷室が覆い被さった。分厚い胸板が一颯の薄い背中に貼りつく。首筋に鼻先が押しつけられ、匂いを嗅がれる。汗と愛液と精液が混ざった、甘い獣の匂い。

「お前のまんこ、精液でぐちゃぐちゃだ。まだ足りないのか」

「たりない……っ♡♡ もっと……っ♡♡ おちんぽでぐちゃぐちゃにしてっ♡♡♡」

壊れた。一颯は壊れた。自分から腰を突き出し、カントを氷室のペニスに押しつける。ぬちゅ……♡♡と先端が入り口を割った。

背後から——一気に。

「ひゝ あゝ あゝ っっ♡♡♡ 奥までっ♡♡ 一気に全部っ♡♡♡」

バックは最も深い角度で子宮を突ける体位。氷室のペニスが一颯の子宮を背後からえぐり上げた。二回分の精液がまだ子宮に残っていて、新たなピストンでかき回される。

ぐちゃ……♡♡じゅぷ……♡♡ずちゅ……♡♡

精液と愛液が混ざり合う下品な音がロッジ中に響いた。窓の外の吹雪の咆哮すら掻き消している。

「おちんぽ♡♡ おちんぽお♡♡♡ 奥にっ♡♡ 当たってっ♡♡
もっと強くっ♡♡♡」

一颯は自分から腰を振り始めていた。氷室の突き上げに合わせて子宮を打ちつけにいく。ぱんっ♡♡ぱんっ♡♡ぱんっ♡♡——尻と腰がぶつかり合う音。

首筋に歯を立てられた。皮膚にくっつきり歯型が刻まれる。噛み痕。氷室の獣が解き放たれている。

「種付けしてやる。お前の子宮に精子全部注いで、孕ませてやる」

「はらっ♡♡ 孕むっ♡♡ 孕んじゃ——でもっ♡♡ 止まらないっ♡♡ おちんぽ気持ちよすぎてっ♡♡♡」

(ぼく男なのになっ♡♡ 孕むとか言ってるっ♡♡ 男としてのプライドがっ♡♡ ぐちゃぐちゃに……っ♡♡ でもカントがっ♡♡ 子宮がっ♡♡ 嬉しがってるっ♡♡♡)

氷室のピストンが最高速に達した。ずちゅずちゅずちゅ♡♡♡——ロッジの壁が軋む。ぱんぱんぱん♡♡♡——腰を叩きつける音が途切れない。汗が一颯の背中の窪みに溜まり、氷室の腹に当たって弾け散った。

「出すぞ。全部お前の子宮におちまける」

「出してっ♡♡♡ なかにっ♡♡♡ いっぱい出してっ♡♡♡」

ぶちゅんっ♡♡♡——三回目。子宮に精液が叩きつけられる衝撃で、一颯は潮を噴きながら絶頂した。カントから愛液と潮と精液が混ざった液体が噴き出し、毛布を水浸しにする。白い泡がカントの縁からぶくぶく溢れ、太腿を伝い膝裏まで垂れた。

四肢の力が抜ける。崩れ落ちる一颯を、氷室がペニスを挿したまま横向きに抱き込んだ。背中から密着して、首筋に唇を当てたまま。結合部からとろとろと白濁が溢れ続ける。

暖炉の火が赤い熾火に変わり始めている。時間が経っている。どれ

くらいかは分からない。

「……抜いてくれないっ♡♡ いつ抜いてくれるの……っ♡♡」

「まだ」

それだけ。氷室のペニスは一颯の中で、硬いまま脈を打っている。

＊

四回目は——一颯が自分から跨がった。

精液三回分を孕んだカントで。氷室の腹筋の上に膝をついて、白濁でぬるぬるに光るペニスの先端に自分のカントを押し当てて。

「入れるっ……自分でっ♡♡」

腰を落とす。ずぶっ♡♡♡——自重で根元まで。子宮を突き上げられて白目を剥きかけた。

(自分で挿れたっ♡♡ もう……っ♡♡ ぼくは被害者じゃないっ♡♡ 自分からおちんぽ欲しがって跨がった……っ♡♡ 共犯だ……っ♡♡)

それが——たまらなく、甘かった。

「あゝ あゝ っ♡♡ おっきい♡♡ おちんぽっ♡♡ おっきすぎっ♡♡♡」

腰を上下に動かす。ぬちゅん……♡♡ずぶ……♡♡ぬちゅん……♡♡ずぶ……♡♡。三回分の精液がローションになって、ペニスが抵抗なく出入りする。子宮口にカリが引かかるたびに全身がびくんと跳ねた。

「ずるい……っ♡♡ ずるいよ……っ♡♡ こんな身体にしたの、

あんたのせいだからっ♡♡♡」

「……ああ。俺のせいだ」

氷室が下から突き上げた。一颯の腰を支え、角度を変え、これまでで最も深い位置まで到達する。子宮口を完全に押し広げる感覚。

「あゝっ♡♡♡ 深っ♡♡ いちばん奥っ♡♡ ぜんぶ入ってっ♡♡♡」

そのとき——氷室の指が、お尻の穴に触れた。カントから溢れた精液と愛液が谷間を伝って、そこまでぬるぬるに濡らしている。

「ッ——♡♡♡ そこっ♡♡ ちがっ♡♡ そこはおまんこじゃ…
…っ♡♡♡」

「ここの敏感だな。触った瞬間にカントが締まった」

氷室の親指がゆっくりとお尻の穴を押し広げる。精液が潤滑剤になって、ずぶ……♡♡と指が沈んだ。カントにはペニス。お尻には親指。前と後ろを同時に塞がれた。

「ひゝ あゝっ♡♡♡ 前もっ♡♡ 後ろもっ♡♡ 同時にっ♡♡♡
♡ だめ、おかしくなるっ♡♡♡」

薄い壁一枚の向こう側にペニスの存在を感じる。指とペニスが互いの感触を増幅させて、一颯の脳を焼いた。騎乗位で自分から腰を動かすたびに、前と後ろが同時に刺激される。

「おなかぁ♡♡♡ おなかの奥がっ♡♡ ぐちゃぐちゃにされてるっ♡♡ 精子でっ♡♡ おちんぼでっ♡♡ 指でっ♡♡♡」

（もう戻れない♡♡ ぼくの身体、おちんぼなしじゃ生きていけないくらいっ♡♡ 壊されてるっ♡♡♡）

一颯は壊れた笑みを浮かべて涎を垂らしながら、自分で腰を振り続けた。涙も流れている。快楽で理性が蕩けた顔を、暖炉の赤い炎が照らしていた。

四回目の射精。子宮が溢れ、入りきらなくなった精液がカントの隙間からぶくぶく♡♡♡と逆流する。お尻の穴に入った指の周りからも白濁が垂れた。

一颯はペニスを抜かせなかった。カントがきゅう♡♡きゅう♡♡と締めつけ、離さない。氷室にしがみついたまま、肩口に顔を埋める。

「……抜かないで♡♡ まだ入れといてっ♡♡♡」

「抜かない。まだ足りない」

氷室の腕が一颯の背中に回る。拘束する腕。離さない腕。

＊

窓の向こうが白み始めていた。吹雪の風音がわずかに弱まっている。暖炉の火は赤い熾火で、ロッジの中は暗い赤に沈んでいる。

一颯は自分から四つん這いになっていた。

カントを氷室に向けて突き出し、自ら見せつけている。四回分の精液が詰まったカントは赤く腫れ上がり、小陰唇の縁に白濁がこびりつき、中からとろとろ溢れ続けていた。クリトリスは小さく勃起してびくびく震え、お尻の穴もさっきの指で少し開いていて、そこにも精液が伝っている。

「まだっ♡♡ 朝まで、まだ時間あるっ♡♡ 最後にもう一回っ♡♡」

自分が何を言っているのか、分かっている。分かっている、止めら

れない。

「種付けしてっ♡♡♡ ぜんぶっ♡♡ 子宮にっ♡♡ 出してっ♡♡♡」

数時間前まで、電車の中でスノボの板を抱えて友達と笑っていた。
更衣室を避けて、秘密を守って、男として生きてきた。

その自分が。

「孕ませてっ♡♡♡ あんたの子がっ♡♡ 欲しいっ♡♡♡」

氷室の目が暗い炎を宿した。今夜ずっと張りつめていた何かの――
最後のタガが外れる音がした。

「……孕ませてやる。お前を、俺の子で」

声が、震えていた。あの寡黙な、感情を見せない男の声が。

「――もう他の誰にも触らせない」

背後から貫かれた。最後の一回は、これまでに最も荒々しい。

ぐぼっ♡♡ ぐぼっ♡♡ ぐぼっ♡♡――四回分の精液が中にかき回される音。白い泡がカントの縁からぶくぶく溢れ、膝裏まで垂れる。結合部は体液の沼。愛液と精液と潮が混ざり合った白濁が、二人の股間から毛布まで糸を引いていた。

ロッジの壁が軋む。毛布がずれ落ちる。暖炉の熾火の前で、二つの身体が獣みたいにぶつかり合う。

「ひゝ あゝっ♡ ひゝ あゝっ♡ ひゝ あゝっ♡♡ おちんぽお♡♡♡
♡ いちばん奥っ♡♡ 子宮めちゃくちゃにされてっ♡♡♡」

氷室の息が荒い。獣の呼吸。言葉の少ない男の口から、途切れ途切

れに声が漏れる。

「離さねえ」

腰を叩きつける。

「もう」

子宮を突き上げる。

「離さねえぞ」

一颯の腰を両腕で抱え込み、全身で覆い被さり、最深まで突き入れて――。

五回目。

ドビュルルルッ♡♡♡――子宮に精液が注がれた。これまでに最も多い。子宮がぱんぱんに膨れ、入りきらなくなった精液がカントの隙間から白濁の泡になって逆流する。結合部がぶちゅ……♡♡ぶちゅ……♡♡♡と音を立てた。

「あゝ ひいゝ いゝ っっ♡♡♡♡ なか♡♡ おなかあ♡♡♡ 精子でいっぱい♡♡♡ あんたの赤ちゃんっ♡♡ ぜったい♡♡ 孕むからっ♡♡♡♡」

一颯は痙攣しながら崩れ落ちた。氷室の腕の中で、壊れた笑みを浮かべたまま。涙と涎と汗でぐしゃぐしゃの顔。カントの中は五回分の精液で満たされて、子宮口が精液を閉じ込めるようにきゅっ♡♡と収縮している。

太腿は体液でぬるぬるに光り、毛布は救いようのない惨状だった。

壊れた。完全に。